

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 1 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520162

研究課題名（和文） ドイツ現代美術におけるナチズム/ホロコーストの記憶表象研究

研究課題名（英文） Study on Representation of the Nazism- and Holocaust Memory in German Contemporary Art

研究代表者

香川 檀（KAGAWA MAYUMI）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：10386352

研究成果の概要（和文）：本研究は、1980年代以降のドイツにおいて、現代アートがナチズムやホロコーストという「負の過去」の記憶をどのように表現しているかを、「痕跡保全」「対抗記念碑」「アーカイヴ・アート」などの類概念のもとで解明した。事例研究でそれぞれの作品の意味作用を読解することにより、こうした「記憶アート」の可能性と問題点をあきらかにできた。成果は、『想起のかたち——「記憶アート」の技法と歴史意識』（仮）と題して、出版準備中である。

研究成果の概要（英文）：This study investigates, how the contemporary art in Germany since 1980's have dealt with and represented the memory of the Nazism and Holocaust, by means of the typology such as "trace-preservation", "counter-monuments", "archival art" and so on. Through some case-studies of typical artworks, it has developed the readability of these "Memory arts", along with their possibility and the problem. The publication of this result is now in preparation, under the title of "Forms of Remembrance : Historical Consciousness of German Contemporary Art".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,400,000	420,000	1,820,000
22年度	800,000	240,000	1,040,000
23年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論、美術・記憶・ドイツ・ナチズム・ホロコースト・現代アート、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

① 研究の学術的背景

本研究は、戦争や大量虐殺といった負の過去の記憶を現代芸術がいかにして表象しう

るか、という問題意識から出発している。具体的には、1990年代以降の国内外における「記憶と美術」をめぐる言説の布置状況から構想された。ドイツにおけるナチズム/ホロ

コーストの芸術表現は、そのための重要な参照先であり研究対象であると考えられる。ドイツ（とくに旧西独）において制作された現代アートの意味論的な読解を行なうことが、本研究の目的である。

② 国内外の研究動向

「記憶／想起」と現代美術：ドイツでは1980年代後半から90年代をとおして美術展や公共の場で、ナチズムやホロコーストの記憶を主題化したアートが顕著になった。それらの作品は、近現代美術が切り拓いた新たな表現方法を駆使して、社会のトラウマ的な記憶のテーマと取り組んでいる。こうした美術の動向に呼応するように、1980年代からドイツでは記憶に関する研究が多数公刊されており、美術に関連づけた論考や雑誌特集も少なくない。とくに2007年に邦訳されたアライダ・アスマンの『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』（1999）は、文化科学の立場から記憶の諸理論を考察しつつ、キーファー、ジグドソン、ボルタンスキー、カバコフら欧米の現代美術を代表的な「記憶アート」と見なし、そこにおける歴史意識を探ったものである。その他、ドイツや英米における美術史や文化研究の分野で、造形と図像による記憶イメージの表象について分析が試みられている。日本国内でも、記憶とイメージに関する言説は近年とみに盛んであるが、美術との関連でなされている理論的な研究はきわめて少ない。

ホロコースト研究における視覚表象：英米圏で行なわれているホロコースト研究において、ホロコーストの表象をめぐる議論にはすでに長い蓄積があり、なかでもソール・フリードランダー編『アウシュヴィッツと表象の限界』（1992、抄訳1994）ではホロコーストの記憶とその芸術表象の問題が、歴史学と

哲学の立場から扱われ、映画や文学についてもふれられている。また、アメリカのユダヤ学者 James E. Young による、ホロコーストの記憶の形象化や史跡保存についての国別調査 *The Texture of Memory—Holocaust Memorials and Meaning*, New Haven and London, 1993 や現代芸術のホロコースト表象論が数冊あるほか、オランダの Ernst van Alphen による現代芸術への「ホロコースト効果」を論じたモノグラフィーがある。ただし、いずれも造形芸術の専門家ではないため美術作品の分析が不十分である。

【本研究の位置づけ】

以上の動向をふまえ、本研究はドイツ国内で制作された美術作品（ただし外国籍の作家によるものも含める）をとりあげ、記憶表象の諸理論を参照しつつ造形の意味作用についての解釈のパラダイムを構築することを目指す。その際に、これまで看過されがちであったジェンダーの視点にも配慮し、歴史における「抑圧されたもの」と「女性性」の関係を明らかにする。こうした作品研究と並行して、ドイツにおける社会的背景として、「記憶アート」を公共空間に受容するための文化政策や、美術館・博物館の展示政策を調査する。作品の内在的美学と社会への作用美学との両面から考察していくことで、トラウマ的な記憶を想起する造形表現の可能性を明らかにするものである。

【これまでの研究成果と着想の経緯（1）】
——ドイツでの現地調査と国内での研究報告：申請者は1997年から2000年にわたるロンドン大学とベルリン・フンボルト大学での留学中に、現代アートと公共芸術、および博物館や美術館での展覧会を視察した。帰国後、東京大学の研究員として「記憶の表象」をテーマに調査活動を継続し、2002年にはベ

ルリンとハンブルク、ハーゲンを、2003年にはザールブリュッケン、武蔵大学に着任後は2006年にフランクフルト、2008年にはベルリンとミュンスターのそれぞれ公共芸術や美術館所蔵のアート作品を調査し、結果を学内の研究会や、教育思想史学会（2002年）、明治学院大学シンポジウム「戦争と記憶」（2003年）、広島大学科研費基盤研究会「戦争・他者・芸術」（2004年）、ジェンダー史学会シンポジウム「戦争体験と記憶」（2005年）、日本ドイツ学会シンポジウム「記憶と想起の空間——ドイツにおける歴史意識のアクチュアリティ」（2008年）などで報告した。

【これまでの研究成果と着想の経緯（2）】

——理論研究と学会誌等での論文発表

現代美術と歴史的現実との関連を考察する一方法として、作品に引用された地名・人名・日付などの記号論的な意味を、記号学者パースや哲学者リオタールの著作をもとに「現実指示性」「指標性」として論じ、助成金をうけた鹿島美術財団の報告書への執筆（2003年）、および美学会の全国大会で口頭発表（2003年）を行なった。さらに、現代美術において顔写真や遺品などを引用した作品をとりあげ、それらを出来事の「痕跡」として詩的な意味作用について論じた「痕跡とレトリック」を武蔵大学の紀要に発表した（2005年）。並行して、従来の記念碑の概念を変革していく現代アートによる公共芸術を「対抗記念碑」の観点から分析した論文を、上記の科研費研究会（広島大学）の報告書（2005年）に発表している。また、1980年代から90年代にかけてドイツでこのような公共芸術が盛んになった文化的背景と施策についても、上記の日本ドイツ学会の発表でふれ、同学会機関誌『ドイツ研究』に論考を寄せた（2009年春に刊行）。

2. 研究の目的

以上の研究を背景としつつ、現代アートによる記憶表象の理論構築をめざす。

期間内に予定した研究の構想は次の3点から成る。

（1）研究の柱となる主要作家の作品調査

これまで散発的にしか行なえなかった海外の作品を作家ごとに体系的に見出し、資料を収集するとともに、現存作家については、可能なかぎり作家に直接会って面談調査を行なう。とくに女性作家については、ジェンダーの視点から作品構想の要点を聴取する。

（2）従来の記念碑に加え、歴史博物館や史跡のような社会的な記憶装置に現代アートがどのように関わっているかの調査

これまでの調査の過程で、記憶をテーマとする現代アートの作品にアーカイヴやミュージアム展示を模したものが少なからず認められたからである。また実際、ドイツの歴史博物館には現代アートを展示に導入している例も見られる。その具体例を検証することで、博物館政策のうえでの効果や問題点をあきらかにする。史跡については、「場の記憶」という観点から、ドイツでの議論を調査していく。

（3）文化政策の調査

自治体レベルで現代美術家の創意による作品を公共空間に受け入れるための条例整備など、これまでの申請者の研究では十分に掘り下げられなかったドイツの文化政策について本格的な調査を行い、社会の歴史意識をめぐる公共の議論との関連を考察する。

3. 研究の方法

調査対象を絞りこむための資料収集（学術論文、展覧会カタログ・作品図録、官公庁の文書など）と実見をふくめた作品研究、および作家やミュージアム学芸員などへのインタビュー調査が主体となる。同時に、日本国内の研究者や美術家との研究交流も適宜、行なう。

（1）現代美術に関する資料収集と作品研究。

ナチズム／ホロコーストの記憶をテーマにした作品制作で顕著な活動をみせている作家について、資料を収集し、実見も含め作品研究を行う。とくにヨーゼフ・ボイス、アンゼラム・キーファー、ジークリット・ジグルドソン、レベッカ・ホルン、ヨッヘン・ゲルツ、クリスチャン・ボルタンスキーなどが候補となる。文献と実見だけでは分かりにくいジグルドソンの作品については、インタビュー調査を行う。

（2）ドイツの歴史博物館で試みている「歴史展示への美術作品の導入」についての調査。

具体的には、フランクフルト歴史博物館や、ドルトムント市立博物館、ハーゲンのオストハウス美術館などの訪問調査と学芸員への面談調査を実施する。フランクフルト歴史博物館は、2000年にシルン美術館と共催で記憶表象をテーマとした展覧会を行っており、その展覧会カタログ Wettengl, Kurt (Hg.), *Das Gedächtnis der Kunst-- Geschichte und Erinnerung in der Kunst der Gegenwart*, Ostfildern- Ruit: 2000 に記載されている情報をさらに掘り下げて調査を行なう。歴史博物館の展示と美術との関係については、例えば Fehr, Michael: “Kunst als ‚Bewußtsein von Geschichte,“ M. Fehl/ B. Schellewald, *Sigrid Sigurdsson Vor der Stille -- Ein kollektives Gedächtnis*, Köln, 1995 および同著者がベルリンの国

立歴史博物館に関する論文集に寄せた „Das Museum als Ort der Beobachtung Zweiter Ordnung ; Eine Überlegung zur Zukunft des Museums“, In: *Geschichtskultur in der Zweiten Moderne*, herausgegeben für das Deutsche Historische Museum von Rosmarie Beier, Frankfurt/New York , 2000, などがある。こうした問題意識にたつ学術研究を、さらに収集していく。

（3）記念碑や史跡など、公共の<記憶の場>に美術作品が受容される社会的な背景の調査・研究。

戦後ドイツの文化政策や、芸術助成の法制度、芸術家団体の活動と地方自治体の条例改正などについて、情報を収集する。早くから条例改正などで公共芸術を助成したブレーメンやハンブルク、ベルリンなどの実態調査から着手する。

以上の3つを重点課題としながら、国内外の研究者との交流を行い、研究会や講演会なども組織していく。具体的には、申請者が研究分担者となった科研費基盤研究「20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究—アジアにおける戦争とディアスポラの記憶」（基盤研究B 課題番号 20310156 研究代表者 北原恵〔大阪大学〕平成 20～22年）での研究報告や、同研究会をつうじての国内外の研究者との交流を行なう。また、日本国内でもテーマや表現手法の点に関連する美術作品の展覧会があれば、随時これを視察調査に行く。

4. 研究成果

1) 記憶表象に関する研究の総括

これまで記憶表象について申請者が執筆してきた既発表論文をまとめ、本研究をドイツにおける記憶芸術研究の文脈に位置づけるために、戦後ドイツにおける研究動向を調査

し、論文としてまとめた。（「ドイツにおける記憶表象の研究状況」本科研費研究報告書に所収）。これを序論とし、すでに発表した6本の論文を加筆改稿して本論として構成し、1本の論文「ドイツ現代美術における想起のかたち——〈記憶アート〉の技法と歴史意識」にまとめた。本研究の成果として、現在、出版準備中である。

2) 記念碑・アーカイヴ・歴史ミュージアム展示と現代アートの関わりについての調査

記憶をテーマとする現代アートのなかに、記念碑やアーカイヴ、ミュージアム展示などの形態を模し、これらの制度化された記憶の装置を作品に援用したものが多くみうけられることが指摘されている。本研究では、この点に注目してドイツでの記念碑論争、アーカイヴ論、ミュージアム論にかんする文献を収集し、ボルタンスキー、ゲルツ、ジグルドソンらの作品研究に参照した。あた、ベルリンをはじめドイツ各地およびウィーンやプラハに制作されている現代アートによる記念碑を視察した。同時に、制度化された記憶装置のがわで現代アートを応用している例（ブラウンシュヴァイク強制労働キャンプ跡ミュージアム、ゲルツの対抗記念碑、フランクフルト歴史博物館の常設展示など）を調査した。また、フランクフルト歴史博物館の協力を得て、歴史展示におけるジェンダーの問題も調査して発表した。

3) 社会背景としての文化政策の調査

ドイツにおいて負の過去を克服しようとする「想起の文化」に現代アートが深く関与している社会的、文化的、歴史的背景を、おもに文献調査と聞き取り調査によって明らかにした。ドイツにおける公共芸術の文化行政の歴史、および戦後1970年代以降の自治体レベルにおいて「想起の文化」を推進した現場の意識の変化などが明らかになった。

4) 研究会および共同調査

二人の研究協力者である鈴木賢子氏（東京工芸大学ほか非常勤講師）、石田圭子氏（東京芸術大学非常勤講師、2012年10月より神戸大学専任講師）と定期的に研究会を行なったほか、ホロコーストの記憶にまつわる史跡・記念施設などを見学する共同調査を行なった。美学・芸術学を専門とする両氏との共同作業は、本研究の理論的な掘り下げにとってきわめて有意義であった。

5) 本研究の意義

戦争の記憶と美術との関連について、社会的記憶を形成する公共芸術の点から論じた研究は、わが国ではまだ緒についたばかりである。個々の作品じたいがもつ内在的な美学と、作用美学的な考察、また社会的条件としての制度面の試みを、ドイツというフィールドで調査したことは、日本における戦争や災害などの記憶を社会的に保持していくための記念施設など、望ましい「想起のかたち」と「記憶の場」を創出するうえでの議論に大いに資すると考えられる。また、歴史の記憶表象を研究するうえで、ジェンダーの視点に立ち、作品における女性の経験の表象、および作品の造形原理がもつ性的差異を分析することは、わが国における表象理論の新たな展開に寄与するものと思われる。同時にまた、こうした研究に依拠した批評活動をとおして、女性美術家の政策や展示活動など、アートの現場に対しても貢献できると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計8件）

1. 香川 檀：「現代美術における〈蒐集〉の技法とジェンダー」明治学院大学言語文化研究所『言語文化』査読無、第29号、2012年、226-246頁
2. 香川 檀：「負の歴史を想起する「記憶アート」——ドイツ戦後美術の動向と研究状況」科研費基盤研究成果報告書『ドイツ現代

美術におけるナチズム／ホロコーストの記憶表象研究』査読無、2012年、5-20頁

3. 香川 檀：「アーカイヴ・アートにみる記憶のアルケオロジー——ジークリット・ジグルトソン『静寂の前に』」『武蔵大学人文学会雑誌』査読無 第42巻3・4合併号、2011年、43-78頁

4. 香川 檀：「空間の経験と〈場〉の記憶——レベッカ・ホルンの〈独身者の機械〉」、日本ドイツ学会編『ドイツ研究』査読有、第44号、2010年、56-66頁

5. 香川 檀：「心理的トポスとしての〈場〉の記憶——レベッカ・ホルンの〈花嫁機械〉」、『武蔵大学人文学会雑誌』40周年記念号、査読無、2010年、572-607頁

6. 香川 檀：「越境する記憶——現代アートの日独比較から」、高麗大学校日本研究センター2009年度国際学術シンポジウム「グローバル時代の外国研究と自国研究」(主催：高麗大学校日語日文学科) 高麗大学校日本研究センター編『日本研究』査読無、vol.12、87-102、2009年

7. 香川 檀：「ミュージアムとジェンダー——展示による経験の可視化をめぐる」日本学術会議編『学術の動向』、日本学術協力財団発行 査読無、2010年5月号、76-78頁

8. 香川 檀：「記憶の公共空間に介入するアート——歴史意識としての〈証跡保全〉」、日本ドイツ学会編『ドイツ研究』査読有、第43号、2009年、19-37頁

〔学会発表〕(計7件)

1. 香川 檀：「現代美術における〈蒐集〉の技法とジェンダー」明示学院大学芸術学科シンポジウム「西洋美術とジェンダー——視ることの制度」2011年12月、明治学院大学白金キャンパス

2. 香川 檀：招待講演「映像・アート・記憶の交差」、映像作家レナーテ・ザミ上映会(アテネフランセ文化センター)2011年2月

3. 香川 檀：招待講演「レベッカ・ホルンの〈花嫁機械〉」東京都現代美術館、2010年1月

4. 香川 檀：. 研究発表「アーカイヴ・アートによる歴史的記憶の表象」表象文化論学会 第5回研究発表集会、2010年11月(於：東京大学駒場キャンパス)

5. 香川 檀：研究発表「空間の経験と〈場〉の記憶——レベッカ・ホルンの〈独身者の機械〉」日本ドイツ学会第25回総会、フォーラム「イメージとテキストによる記憶の技法——キーファー／ホルン／ゼーバルト」2009年6月(於：共立女子大学)

6. 香川 檀：招待講演「現代美術を視る——現代アートから記憶がみえる」サマー・アート・スクール「鑑賞——見ることを問い直す

8つのエクササイズ」(主催：クリエイティブ・アート実行委員会、共催：東京都教育委員会)、2009年8月(於：国立オリンピック記念青少年総合センター)

7. 香川 檀：研究発表「ミュージアムとジェンダー——展示による経験の可視化をめぐる」日本学術会議 史学分科会シンポジウム「歴史教育とジェンダー——教科書からサブカルチャーまで」主催：日本学術会議・史学委員会 歴史学とジェンダーに関する分科会、2009年12月(於：日本学術会議)

〔図書〕(計2件)

1. 香川 檀：分担執筆「ミュージアムとジェンダー——展示による経験の可視化をめぐる」、長野ひろ子・姫岡とし子編『歴史教育とジェンダー——教科書からサブカルチャーまで』、青弓社、227-258頁、2011年

2. 香川 檀：単著『想起のかたち——〈記憶アート〉の技法と歴史意識』(仮)、水声社、2012年10月(予定)

5. 研究組織

(1) 研究代表者

香川 檀 (KAGAWA MAYUMI)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：10386352

(2) 研究協力者

鈴木 賢子 (SUZUKI YOSHIKO)
東京工芸大学／東京藝術大学／実践女子大学、各非常勤講師
研究者番号：20401482

石田 圭子 (ISHIDA KEIKO)
東京藝術大学／早稲田大学、各非常勤講師、2012年10月より神戸大学専任講師
研究者番号：40529947